

4/13 星期

論説

2022・4・13



ロシアは一線越えるな

大量破壊兵器

ロシアがウクライナでの戦争打開のため核兵器を生産・使用兵器としていた大量破壊兵器を運用するのではないか、という懸念が深まっている。強行すれば人類を危機にだらししかねない」とモハーチン大統領はわざわざ来られた。

第三世界でその認識はされていないが、ウクライナ南部の港町マリウポリで、AP=全防守する海軍軍事組織「アゾフ」大隊は、ロント軍が化学兵器を使つたと主張している。

ロシアは批准した化学兵器禁止条約に基づき、二〇一七年にアーキン田井が國內に残りこじた化学兵器の廃棄完了を実現した。

ところが、翌二八年に米国が始めた「ロシア機密部機器殺人毒氣事件」など、二〇年のロシア反体制派指導者ナバリニ氏の毒殺未遂事件ではともに神経剤「ノビチヨウ」が使われた。欧米は両事件ともロシア当局が関与したと断定した。ノビチヨウは化学兵器禁止条約で使用や生産、保有が禁じられている。ロシアは全世界の機関で条約を「りそば破つていた」。

一方、ロシアは一九九三年の軍事コントロールで、核兵器の使用は認定的であつても「破滅的結果をもたらす」を否定していた。

ところが九〇年代後半になると、「少額の既定使用によって敵の軍事行動を停止させる」が、紛争が激化するのを緩和する「テスカレーション」として発想が軍部に生まれた。コソボ紛争で北大西洋条約機構（NATO）の圧倒的な通常戦力を見せつけられたのがきっかけだった。

この考え方が危険なのは言つまでもない。九三年の軍事コントロールが指揮するもとで、全面的な核戦争に発展する危険性はあくまでもない。

ロシアが大量破壊兵器を使用すれば歐米も報復措置を取る構えだ。NATOのストルテンペルグ議長は「今回の紛争の性格を完全に放棄する」と軍事介入もおわせてロシアに警告している。

無差別攻撃に加えて民間人の捕虜問題、虐殺など、ロシアの戦争ぶりは極端だ。「これ以上ロシアが一回たる威嚇表示を必要がある。